

中学生棋士、藤井聡太四段の活躍に想う

平成 29 年 6 月 26 日夜、昨年中学 3 年生でプロの将棋界にデビューし、以来連戦連勝を重ねた藤井聡太四段が、棋界の連勝記録（28 連勝）を更新したことを知った瞬間、その日朝から気になっていた案件が無事に終わった時のような、何とも言えない安堵感を覚えると共に、彼のこの先の想像を超える活躍の可能性について思いを巡らせた。

藤井四段は昨年 10 月、史上最年少の 14 歳 2 ヶ月でプロ入り。加藤一二三九段（77）が持つ 14 歳 7 ヶ月の最年少記録を 62 年ぶりに塗り替え、話題を呼んでいた。

昨年 12 月 24 日のデビュー戦の相手はその加藤一二三九段（当時 76 歳）、年齢差 62 歳の対局もこれまた新記録であった。加藤九段はデビュー当時「神武以来の天才少年」と言われたそうで、その人物を藤井四段の初対戦相手に選んだ日本将棋連盟の計らいには、心底感心させられた。

彼は加藤九段との初対局を白星で飾り、以後勝ち続け、羽生善治三冠（46）や丸山忠久九段（46）らトップ棋士の連勝記録を抜き、ついには神谷広志八段が持つ 28 連勝（昭和 62 年）をも抜き去った。残念ながら記録更新後の対局で敗れ、30 連勝はならなかったが、連日連夜のフィーバーも少しは沈静化するだろうから、ここで一度すべてをリセットし、これを再出発のための好機と捕らえ、新たな気持ちでチャレンジしてもらいたい。

それにしても将棋という頭脳勝負の世界で、プロデビューしたばかりの中学 3 年生が、並み居るプロ棋士を相手に連戦連勝したこの現実は、まさに驚きを超えたものである。

彼のこの若さでこの実績が作れた原因を考えると、「持って生まれた天賦の才能」は勿論、育った家庭環境を含む様々な要因が加わり、「勝つ」という結果を残すことで、本人が強い自信を持つようになり、それがここにきて一挙に開花したということではなかろうか。

この天才少年がどんな環境で育ったのか、大変興味があったので調べたところ、母親の話では幼い頃から外遊びが大好きで、庭の木にも登るような活発な少年で、運動会ではリレー選手の常連として頑張っていたそうであり、家に閉じこもっているような内向きの性格では全くなかったそうである。

その一方、幼稚園のときにはすでに九九を習得。また、小さい頃から県庁所在地や世界各国の首都名をあてるクイズ、4 つの数字に四則演算を組み合わせて「10」を作るゲーム「メイクテン」などに熱中していて、勉強そのものが好きというよりも、問題を解いたり何かを覚えたりすることが単純に好き、という感じだったとのことである。

5 歳で将棋を始めた彼は幼稚園児の時、難解な詰め将棋に挑んだ際には、「考えすぎて頭が割れそう」と口にしていた。他のことに注意がいなくなるぐらい、好きなことには本当に夢中になり、そんな彼が何かに集中しているときには、母親としてできるだけ邪魔をしないように見守っていたそうである。

小学校低学年時代のエピソードとして、谷川浩司九段による次の話をご紹介したい。

平成 22 年 11 月。名古屋で開かれた「将棋の日」のイベントで、指導対局をしたことが

あります。このとき、私の玉が敵陣に入り勝ちになるんですが、そこは譲って「引き分けにしよう」と提案したんです。すると突然、将棋盤におおいかぶさって泣き出したのです。イベントの残り時間も少なく、困り果てたことを思い出しました。

人前で彼ほど悔しさを表した子供は珍しかった。勝負師としては必要なことだが、人前ではいかなものかと。そんな彼がプロも参加する「詰将棋解答選手権」に出て優勝した。奨励会の三段になった頃、「あっ、あのときの少年だ」と分かりました。(以上谷川九段談)

報道で見る柔和な感じの今の藤井四段からは想像もできない幼少時代のエピソードだが、心に秘めた強烈な「負けず嫌い精神」は益々強くなっているのであろう。

将棋や遊び、好きなことを通して自然と集中力が養われていった藤井四段。学校の授業で学んだ内容もその場で理解し、覚えていった。それ故に、愛知県内有数の進学校である名古屋大学教育学部附属中学を受験する際、塾に通わずに競争率8倍の難関を突破した。中学校で好きな科目は地理、国名や山の標高を数多く暗記、高校時代に山岳部に所属していた4歳上の兄と山の話で盛り上がることもあるとのこと。

ただし、その集中力は、「考え事をしていると他のことはきれいさっぱり忘れてしまう」ほどで、小学生の頃には学校にランドセルを置いたまま帰宅したり、道を歩いていて溝にはまったりしたこともあったそうである。

藤井四段は小学校の頃から詰め将棋が得意で、最近では前記の「詰将棋解答選手権」で3連覇するなど、特にその終盤力は圧倒的である。加えて、近年急速な発達を遂げている人工知能(AI)の活用によって、序盤・中盤力にも一層磨きがかかり、それが今日の結果に結びついているそうである。

AI関連と言えば、将棋界では昨年、三浦弘行九段が公式戦の対局中に電子機器を使用し、不正行為をしたのではないかと疑惑が発生、以後の出場停止処分が下された。どうなることかと心配していたところ、第三者調査委員会による調査の結果、その疑いは晴れたのだが、一連の混乱の責任を取り、将棋連盟の谷川会長が辞任する大不祥事に発展した。

将棋界全体に暗雲が垂れ込めていた中での藤井四段のこの活躍。マイナスの印象を一挙に大きなプラスに転じたその功績は、「将棋界の救世主」と言っても過言ではない。なおこのAIの発達が、複雑な将棋や囲碁の世界にまで大きな影響を持つようになることなど、かつては想像もできなかったことであり、その急速な進歩により、我々の生活スタイルも根本から変わってしまうことになるのだろう。

藤井四段は29連勝の新記録を達成後初の黒星となったが、その後更に2勝して現時点で31勝1敗の驚くべき成績を上げている。だがこれからは、トップ棋士との対戦が多くなり、今までのような連戦連勝とはならず、時にスランプに落ち込むこともあるだろう。

デビュー以来世間から大きな注目を集め、順風満帆だった中学生プロにとり、それ故に今後人一倍苦しい試練が待ち受けているのかもしれない。そんな逆境に直面したとしても、家族や周囲の人達から適切なアドバイスをもらい、更なる飛躍を遂げて各種タイトル獲得の最年少記録更新を目指し、大いに頑張ってもらいたいと願うばかりである。

閑話休題

国会では「加計学園」の獣医学部新設をめぐる「総理の関与」について、先日は閉会中審査まで行ったが、北朝鮮による危機が目前に迫る中、「森友」と「加計」問題のみに国民の関心を向けさせる野党、マスメディアの劣化は「ここに極まれり」と言える。

中でも「加計学園」問題は、天下り問題が発覚し辞任した前川・前文科省事務次官が、「加計学園の獣医学部新設に際し、官邸からの圧力があつた」と、退職した後に暴露したことに端を発している。そこに安倍政権を倒したい勢力が、この機とばかりに呼応して、取るに足りない問題を、あたかも大問題のごとく誇張したのが実態である。

そもそも事務次官とは大臣は別として、文科省トップの立場である。ところが彼を含めた事務次官連中が、過去何代かにわたり法律で禁止されている天下りを、裏で認めていたのが判明し、彼はその責任を取らされて辞任した。かりそめにも、日本の文部科学行政を取り仕切る官庁のトップ自らが、役所ぐるみ天下りを見逃していた責任は極めて重大で、そんな人物は「万死に値する」だろうし、この省の「抜本的組織改革」は必須である。

しかもこの前川氏は、新宿歌舞伎町の暴力団組織とも繋がりのある「出会い系バー」に現役時代頻繁に通っていたことが分かった。そのことで質問を受けると、冷や汗をどっと流しながら、「若い貧困女性の調査のため」との珍回答をしたのはご承知の通りである。

加えて、彼は座右の銘を問われ「面従腹背です」と答えたが、これには我が耳を疑った。こんな人物を他にもない文科省トップに任命した政治家の責任も、これまた重大である。

文科省は長年、日教組のような日本人を貶める勢力と癒着し、最近では「ゆとり教育」、「ポストク1万人計画」、「法科大学院」、身近には「いじめ問題」と、すべての教育行政に失敗した。一方で彼らは天下り先確保のため、これまで雨後の竹の子の如く、大学や学部の新設を認めてきた。少子化の中でのこれらの施策は、当然のこととして学力低下をもたらしたが、「自分たちファースト」で日本の教育行政を劣化させた責任は極めて重い。

今では、通称「出会い系前事務次官」と揶揄される前川氏ではあるが、彼には日本人の美意識として古来存在する「恥の精神」など、全く存在しないのではなかろうか？

なお、それ以上に驚いたことは、文科省ぐるみのこの天下り問題が顕在化した時、政府自民党による官僚の任命責任を厳しく追及した野党や左翼マスコミ（朝日、毎日、NHKその他）だったのだが、その前川氏が、天下り問題で詰め腹を切らされた私憤・怨念から、自爆テロ的に「加計」問題を提起した途端、今度は彼を「勇気を持って内部告発した英雄的人物」に祭り上げる野党や左翼マスコミの節操のなさには呆れるばかりである。

先日、「加計学園」問題に関する閉会中審査のテレビ中継を見ていたが、自民党参議院議員青山繁晴氏の質問に答えた「加戸守行・前愛媛県知事」の証言は、前川氏の証言とは真逆であり大変驚かされた。その趣旨は、「愛媛県にとって、12年間加計ありきだった。今さらこの1~2年の間での加計ありきじゃない」「10年間、我慢させられてきた岩盤規制にドリルで穴を開けていただいた。『それまでのゆがめられてきた行政』が正されたというのが正しい表現ではなかろうか」というものだった。

加戸氏はこのように切々と述べ、偶然にも文部省（現文部科学省）時代の部下であり、首相官邸の意向によって「行政がゆがめられた」と主張する前川・前事務次官に反論した。

これまでの経緯を熟知する当事者の言葉には説得性があり、何よりも加戸氏の誠実さがにじみ出ているようなその証言態度に、テレビで国会中継を見た多くの人は、彼の説明の内容に十分納得したことであろう。（官僚出身者にも、加戸氏のように国家、国民、県民のため心血を注ぐ人がいる事実を知り、少しだけだが希望が持てる思いがした）

ところが多くのマスメディアでのこの証言の扱いは小さく、特に朝日新聞、毎日新聞は閉会中審査に関しては大きく紙面を割いたにもかかわらず、一般記事の中では1行もこの加戸発言を取り上げていなかったそうである。（地上波テレビ報道も全く同様）

まるで、自分たちの安倍政権批判の筋書きに合致しない加戸氏の証言などは、存在しなかったかのようなようであるが、この露骨な報道姿勢は驚きを超え、恐ろしいレベルである。

国会中継を見ていない朝日と毎日の読者は、事実関係が分からないように目をふさがれたも同然であるが、これでは中国の人民日報の報道と、どこが違うのだろうか？

マスコミが「マスゴミ」と呼ばれるようになってすでに久しい。ネット社会で即座に真実が明らかになる現代において、今後彼らは益々信用を失い、軽蔑の対象になって粛々と消えていくのだろうが、それは自業自得として、今の新聞やテレビの報道を信じ込む一般国民には、この悪意に満ちた「マスメディアの実態」を一日も早く知ってほしい。

先日、民進党の蓮舫代表が、前々から疑惑を持たれていた二重国籍問題についてやっと自ら説明をした。要するに昨年まで、台湾籍が残ったままの二重国籍だったそうである。そんな二重国籍を持った人物が、野党第一党の代表との大問題が発覚したにも関わらず、相変わらず報道各社とも「報道しない自由」によって、最小限の扱いである。かつて学歴詐称で辞職を余儀なくされた議員もいたが、今回は政党トップの国籍云々という基本中の基本問題であり、比較にならない別次元の極めて深刻な問題である。

これを詳細に報道しないのなら、報道機関の名には値しない。特にNHKは民放とは違い、強制的に受信料を取って成り立つ組織である。それが「自民党政権、なかんずく安倍政権を貶める」ためならば手段を選ばず、陰に陽に「フェイクニュース」を垂れ流した過去の報道実績も含め、今回の「蓮舫問題」にも目をつぶる報道姿勢であるならば、再び受信料未納運動が起こってしかるべきであろう。

いずれにしても、日本のマスメディアが「ファクトだけ」を報道していると信じる人々は余りにも多い。米国で最近問題になっている「フェイクニュース」がこの日本でも堂々と報道され、先の「加計」問題のように、自分たちに都合の悪いニュースはかの人民日報と同様、「報道しない自由」で国民には知らせないという「恐ろしい言論の自由」がまかり通っているこの現実を、多くの人々に知ってもらうことが何より重要かと考える。

※お勧めの報道番組：「虎ノ門ニュース8時入り」：2時間番組で、ネットで見られます。

後からUチューブでゆっくり視聴することも可能ですので、皆様是非ご覧下さい。

2017.07.21 守山裕次郎